

中央アフリカ、民族芸術と環境のミュージアム

研究年度・期間：平成18年度

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 教授)

共同研究者：狩野 忠正
(環境デザイン学科 教授)

若生 謙二
(環境デザイン学科 教授)

下休場千秋
(環境デザイン学科 助教授)

月溪 恒子
(音楽学科 教授)

学外共同研究者：上羽 陽子
(通信教育部 非常勤講師)

伊藤 幸司
(工芸学科 非常勤講師)

亀井 哲也
(民族博物館リトルワールド
主任研究員)

研究補助者：平金 有一
(博物館 館長・工芸学科 教授)

○研究の概要

本研究の目的は、中央アフリカを研究対象地とする研究者が中心となって、その地域の民族芸術の特質を明らかにし自然環境との関連性を考察するとともに、それらの研究成果を、学生を始めとする一般の人びとに分かりやすく伝えるための展示方法や内容を提案することであった。

研究の概要としては、研究会（8回）、シンポジウム（1回）、製鉄の再現実験（3回）、展示会（1回）を実施した。

○研究会の内容

研究会の実施内容は、以下の通りである。

- 4月4日 第1回研究会：研究計画の確認及び、展示内容とスケジュールの決定
- 5月8日 第2回研究会：展示会の打合せ、シンポジウムの内容検討
- 5月23日 第3回研究会：展示計画、会場構成の検討
- 5月25日 第4回研究会：展示会場の下見と会場レイアウトの決定
- 6月19日 第5回研究会：展示会のポスターと映像資料の検討
- 7月13日 第6回研究会：展示パネル内容、陳列プランの検討
- 10月4日 第7回研究会：展示会の反省会
- 11月30日 第8回研究会：研究の総括

○研究発表1 シンポジウム「民族芸術と環境のミュージアム」

本シンポジウムは、大阪芸術大学芸術研究所第39回教員研究発表会及び、民族芸術学会第101回研究例会として、6月24日に大阪市立東洋陶磁美術館地下講堂において開催した。

「民族芸術と環境のミュージアム」をテーマとするこのシンポジウムには、研究者、学生を始めとする32名が参加した。内容は、井関和代（大阪芸術大学）が司会をし、亀井哲也

(野外民族博物館リトルワールド)、川口幸也(国立民族学博物館)、若生謙二、下休場千秋(以上、大阪芸術大学)の4名の演者が研究成果を発表し、その後、討論を行った。

亀井哲也は「環境とミュージアム、リトルワールドを事例に」をテーマとして、装飾文化としての壁絵をもつ「南アフリカ インデベレの家」を取り上げ、人間が作る最大の「道具」である住まいの展示が、人間の暮らしと自然とのエコロジカルな関係を紹介するために有効であることを説明した。また、野外展示における環境との関連性について、豊かな自然の中で、季節や天気で変化する野外空間において“リアル”な体感が可能となる反面、現地の気候、植生などとの違いや、家屋の傷みと修復、保全管理の必要性について指摘をした。

下休場千秋は「環境とミュージアム、バフツ博物館を事例に」をテーマに、中央アフリカ、カメルーン共和国北西州において500年程の歴史があるバフツ王国の王宮で、毎年12月に行われる王国最大の年中行事「アビンフォ祭り」において観察できる音楽、楽器、衣装をはじめとする多様な民族芸術と、また、王宮の背後にある聖なる森や多数の建物と壁によって複雑に区分された王宮内の空間を紹介し、それぞれの意味づけと、様々な儀礼祭祀が行われていることを示した。さらに、王宮博物館の設置や、カメルーン政府による王宮のユネスコ世界遺産登録の動きについても述べた。

若生謙二は、自身がこれまで関わってきた大阪市立天王寺動物園における野外展示の事例について発表し、上記二名の発表に対してコメントを述べた。そのなかで、展示はメッセージ性が重要であり、動物園の野外展示では、人間と動物との関係を見直し、動物の生息環境を再現する生態展示という最新の展示手法が実現されていることを紹介した。

川口幸也は、英語で展示を意味する言葉displayと、軍隊を動員する意味のdeployとが、共に重ねてあるものを広げるというラテン語のdisplicareを語源とすることを指摘した上で、展示とは、力を見せつけ、存在を誇示するということを意味しており、客観的な内容の展示はあり得ないことを強調した。

後半の討論会では、司会兼研究ディレクターの井関和代を中心に、9月に開催予定の企画展『中央アフリカ、民族芸術と環境』を前提とした意見交換が行われた。特に音楽のような無形遺産の展示方法、風土のような地域の固有性の展示のあり方、近代ヨーロッパが生み出した博物館、美術館におけるアフリカ展示のあり方などについて、活発な質疑応答がなされた。

○製鉄の再現実験

製鉄の再現実験は、以下の通りに実施した。

8月20日～21日 第1回再現実験：製鉄炉の設置、製鉄作業

9月9日 第2回再現実験：製鉄作業の一般公開

9月16日 第3回再現実験：製鉄作業、鍛冶作業、製鉄炉の撤去

アフリカ、バンツウ系の人びとの製鉄作業の再現実験は、井関和代と伊藤幸司（大阪芸術大学非常勤講師）の指導のもと、「きのくに子どもの村学園」の中学生（10数名）の参加を得て、大学キャンパス内15号館横の傾斜地に設置した製鉄炉において行った。これまでの現地によって得られた情報をもとにして、鉄鉱石を焼成し半鉄品（ブルーム）を抽出する作業を実施した。3回にわたる再現実験には多くの見学者も訪れ、19世紀後半にその多くが消滅したアフリカにおける製鉄作業に高い関心が示された。アフリカの民族芸術と環境への関心を高める展示方法を検討するという本研究の目的の一つは、この再現実験によって、参加体験型の展示方法の有効性を再確認することにより達成することができたと考える。

○研究発表2 展示会「中央アフリカ 民族芸術と環境」

この展示会は、休館日の9月10日（日）を除く9月4日（月）から9月13日（水）の九日間、大学情報センター展示ホールで開催された。

本研究の主要な目的は、中央アフリカにおける人びとの暮らし、特に民族芸術と環境との関わりについて、多くの人びとに興味をもち理解を深めてもらうための効果的な方法を、実際に展示会を開催して考察することであった。そのため具体的には、「アフリカの染めと織り」、「アフリカの住居と環境」を展示テーマとして、カメルーンを中心に、ガボン、ナイジェリアなどの周辺各国の「王国文化」に焦点を当て、染織・衣裳品・装飾品（約100点）、織機（2点）、生活用具（約20点）、楽器（12点）、製鉄資料（約20点）などを展示し、会場内における木綿織機の体験、アフリカ太鼓の演奏、ギャラリートークを実施した。また、ポスター、チラシの作成・配布などの広報も行った。

会期中の全入場者数は、1,136名（内、学外は230名）に達し、アンケート結果等によると、多くの来場者にとってこの展示会は、これまであまり知らなかったアフリカの民族芸術や環境について、興味を持ち理解を深める機会になったことが明らかとなった。

○おわりに

以上のように、シンポジウム、製鉄の再現実験、展示会を実施することにより、アフリカの民族文化と環境について理解を深めるという本研究の当初の目的は、ほぼ達成できたと考えるが、そのためには多くの関係者の協力が必要であった。それらの方々に対して、ここに改めて謝意を表します。

研究メンバー一同は、これからも機会があれば、アフリカの民族文化と環境に関する調査研究と情報提供を続けてゆきたいと考えている。